士一同に御酒を賜はつた。彼等は牛の如く飲み、馬の如く喰つて、放談高論に夜を更かした。義綱はその隙を覗つて天顔に咫尺し、彼れが忠義の志のほどを申上げ、此所を脱出しまゐらせるゆゑ、出雲伯耆の間に行幸せられるやうにお勸め申上げた。

けれど總明な帝は、容易に義綱の言を信じ給はず、先づ官女を彼れに下し賜ふて、徐ろに彼れが心事を探らせると、その忠義の志は益々堅固であることが分つたので『汝、出雲に行き、志ある者を誘ひ合せて、朕を迎へよ』と仰せ出された。義綱畏まつて往き、出雲の鹽冶判官高貞が彼れには一族に當るので、仔細を語つて義擧を圖ると、高貞は卽座に彼れを捕へて幽閉して了つた。

待てども〳〵、義綱からは何の便りもないので、帝はいよ〳〵意を決し給ひ、一夜官女の御裝ひで、忠顯と共に行在所を忍び出で、御傷はしくも踏み馴れぬ御徒歩で、後をも見ずに只走り、只ある民家に就いて、港は何れぞと問はせられると、流石は一天萬乘、十善の君に渡らせられるので、包めど玉の御光りは自からにして現はれてゐ

た。その家の主人は直ちに帝を負ひ奉つて港に出で、船人を賴んで帆を上げて、南を指して馳らせた。

白々と夜の明けそめた頃、數十艘の船が、艫拍子を揃へて追つて來るのが見えた。必定隱岐の島からの追手であらうと、舟人は帝を船底に隱しまゐらせ、辛くも虎口を遁れることが出來た。そして名和の港に着かせられると、此の地の名族名和氏は、一族を率ひて帝を迎へ奉つた。名和長年は一族の長で、建武中興の功臣中、正成に次ぐ誠忠の武士であつたが、此の長年の蹶起も正成の義兵に刺戟せられたこと言ふまでもない。

長年は一族を率ゐて帝を奉じ、船上山に陣して大いに義兵を唱へた。佐々木淸高三千の兵を率ゐて、船上山に帝を追つて來たが、既に官軍の勢ひ日々に加はることを聞いてゐる佐々木勢は、長年の謀略に陷つて一層の恐れを懷き、一戰にも及ばずして降る者八百人。すると、先きに富士名判官義綱を捕へて幽閉した鹽冶高貞も、義綱と共

に來つてお味方申上げるなど、皇軍は忽ちにして勢を張り、いよ〳〵忠顯を大將として兵三萬を詑し、一擧にして六波羅を攻めるの策を樹てた。時に赤松則村は山崎に、僧良忠は男山に陣して、何れも六波羅を窺つてゐたが、茲に於てか忠顯の大軍と合し更に叡山の衆徒をも誘つて京都に攻め入つた。

一方鎌倉に在る北條高時は、大軍を以てして猶ほ且つ金剛山（正成籠城）の久しく拔けないことに氣を苛立ち、更に足利尊氏、北條高家に數萬騎を授けて、金剛山包圍軍を授けしめた。けれど北條高家は京都を過る時、赤松則村の軍に會して大敗し、終に討死にして了つた。すると此の事を丹波に到着して聞いた尊氏は、既に天下の大勢に心が動いてゐた折柄であるから、直ちに官軍に降つて、反對に京都に攻め入つた。北條の魔下にある時、尊氏の名は天下に鳴つてゐたので、その尊氏が官軍となつたと聞いて、諸豪族は爭つて彼れに屬したが、獨り兒島高德だけは彼れの下に走ることをなさず、荻野朝忠と共に別に若狹路から京都に攻め入つた。

元弘三年五月、諸軍合して一齊に六波羅を攻めたので、何かは以てたまるべき、北條軍は散々に敗亡して、仲時、時益の二將は部下を捨てゝ東に走つたが、途中近江に於て土豪の爲めに殺されて了つた。

敗報金剛山の包圍軍に達するや、圍みは忽ちに崩れて、賊兵は我れ先きに四散した。官軍の捷報頻々として伯耆の行在所に達したので、天皇は京都へ還御のことを仰せされ、その年五月廿三日を以て御發輦鹵簿肅々として東に向つた。播磨に到つた頃鎌倉の高時は、新田義貞の軍に攻められ、遂に自刄して、北條氏全く滅びたとの快報が到つた。兵庫に着すれば、そこには楠正成が、重圍に苦しんた部下七千を率ゐて迎謁した。

『御麗しき龍顏を拜し奉り、臣正成が喜び、之れに過ぎざるものは御座りませぬ。』

『おゝ、正成か、今日の事、皆な汝が忠義の致す所ぢや。』との有難き御諚に、正成は感泣の涙拭ひもあへず、

『陛下の御威德に依りませいでは、どうしてあの重圍の中に一命を取りとめることが出來ませうや』と奉答した。

京都に還御あらせられた帝は、直ちに新帝を廢し、改めて御即位あつて、文武百官を定め給ふた。史に建武中興とは此の時のことである。蓋し天皇の還御と共に、改元あつて建武となつたからである。

北條の殘黨を所在に索めて平定し、別に藤原師基を太宰の帥として、鎭西探題の北條英時を討つことを命ぜられたが、未だその軍の發せざるうちに、菊池、大友、少貳等九州の豪族使を馳せて、鎭西の北條方は悉く滅亡の由を奏上した。

鎌倉の源氏三代、北條九代、百六十年間の武門政治は、再び王政に復つて、京都は政治の中心となつた。けれど之れは忽ちにして足利尊氏の爲めに覆された。尊氏が北條を離れて遽かに官軍に投じたのは、只だ天下の形勢を觀て、已れに利なる方を擇んだに過ぎなかつた。正成の如く、高德の如く、長年の如く、全身忠義で固まつてゐ

る者の眼から見れば、彼れが大勢力を擁して急に官軍に投じ來つたことは、心强く感ずるよりは、寧ろ不快を感じたのである。彼れが眞に忠義の志を懷いてゐたならば既に正成が兵を赤坂に擧げた時、官軍に來り投ずべきではなかつたか。天下の形勢既に定まり、北條氏の再び起つ能はざるを見るに至つて、而かも進軍の途中に於て、遽かにその態度を豹變するが如きは、內に何物かの野心を藏するが爲めであらねばならぬ。恐らく正成の明智を以てしては、尊氏の此の肚の底は、その來り投じたことを聞いた時、想像することが出來てゐたに違ひない。

四、

建武元年、後醍醐帝は諸將士の戰功を論じて、夫々に行賞あらせられた。正成は攝津、河內二ヶ國の守護、名和長年は因幡、伯耆の守護、そして正成の任官は檢非違使ノ衛門尉で、長年と共に決斷所に與かつて、訟獄を裁斷させることゝせられた。

之れに對して、足利尊氏、新田義貞の行賞は何うであつたであらうか、京師を恢復することが出來たのは、尊氏の功多きに因るとの故を以て、帝は特に武藏、遠江、常陸、下總の四ヶ國を管領せしめられた。そして義貞は尊氏と正成との中位に居る行賞を授けられた。

成るほど京都を恢復したのは、援兵の筈の尊氏の大軍が、遽かに六波羅の敵となつたから、一溜りもなく六波羅軍を破ることが出來たのではあるが、併し假令尊氏の軍が官軍に投じなかつたとしても、いや、彼れが高時から受けた使命を全うして、六波羅を援けて官軍に抗したとしても、天下の形勢は既に定まつてゐたのである。浮足立つて居る。六波羅軍や尊氏の軍が、長く官軍に對抗し得べしとは何うしても思はれなかつた。

義貞の武功にしても、彼れが北條の軍中に在り、天下の大勢を觀望して、病ひと稱して東歸し、護良親王の令旨に令つて兵を募つて、鎌倉に高時を討つたことは、忠は

固より忠であるが、その心事や動機から見て、正成に超えて賞せらるべきものが果してあつたであらうか。

兒島高德以下の行賞とても、以上のことから察すれば、決して正しく當を得てゐなかつたことは想像に難くない。

說をなす者、或ひは曰ふ、尊氏は北條毫下の名將で、北條氏滅亡の後はその勢力殆んど尊氏に歸した。此の大勢力を擁してゐる尊氏にして、若しも論功行賞に不平を抱くやうのことあらば、天下は又再び元弘の亂を繰り返さなければならぬ。英明なる帝は窃かに之れを憂へさせられて、尊氏を懷柔する意味に於て、彼れを殊勳者の如くに賞したのであると。併し之れは餘りに穿ち過ぎて、却つて眞相に觸れてゐない。若し帝にして眞に如上の政策から尊氏を賞せられたのであるとすれば、その御英明を以てして、別に萬一の場合の尊氏に備へる所が、窃かに講じられてゐなければならぬ筈である。然るにさうした準備は毛頭講じられてゐない。

想ふに、英明に渡らせちるゝ帝といへども、長い三年に亘る蒙塵は、如何に苦しく堪へがたく在したか計られぬので、その間、都の空御戀しく、一日も早く九重の御所に還御あらせられたいとの所謂歸心は、必ずや矢の如きものがあつたに違ひない。その時に方つて、北條毫下の大勢力として、窃かに恐れさせられてゐた尊氏が、遽かに官軍に投じて京都に攻め入つたと聞かせられては、帝は總べての修理を超えて、只だ御情に嬉しく、

『尊氏出來した、天晴れぢや』との、宛ら無邪氣なる子供が、心を空しうして望んでゐたものを得た時のやうな、御喜びを感ぜさせられたに違ひない。此の御喜びの現はれが、則ち尊氏に對する過賞となつたのではあるまいか。此の帝が極めて英明に渡らせられながら、兎角感情に馳せられた御振舞ひのあつたことは、その後に於ても屢々現はれてゐる所を見ると、殊に帝都を恢復して改元あつた早々の御行賞に、感情の御計らひが無かつたとは、決して斷言出來ないのである。それが證據に、政權が再び

京都に復つて間もなく、帝は早くも政に倦ませられた御有樣が歴然と現はれ、屢々大遊宴を催され、何にてもあれ珍らしい物を、珍らしい物を求めさせられ、之れを献ずる者は非常に君寵を被るといふやうなことがあつた。出雲の鹽冶高貞が千里の名馬を献じて寵を得たのもその一例である。高貞は隱岐から天皇が脱れ出られようとして彼の富士名判官義綱に命を下して御味方を募られた時、彼れは義綱を引つ捕へて幽閉して置きながら、名和長年が船上山上に義を唱へるに及んで、忽ち官軍に馳せ投じたやうな巧利的な忠臣ではないか。それをすら、逸足の名馬を献じたといふだけで、御寵愛あらせられたとすれば、此の帝は御俊英であらせられただけに、又感情に走らせられることも多かつたのではなからうか。

遮莫、正成は賞の己れに薄いことを以て、忠を二三にするやうな人物ではなかつた延元元年五月、四十三歳を一期として、七度び生をかへて賊を討たんことを誓つて戰死したまでの正成の孤忠を巨細に味はつて見れば、彼れが忠義は決して賞を求める爲

めでなく、名譽を求める爲めでなく、子孫の繁榮を圖る爲めでなく、只だ臣として君に仕へ、己れを空しうして君の御爲めに働くといふ、至誠の顯はれであつたことが解るのである。

それはさて措き、帝の御側には、賢臣中納言左兵衛督藤原藤房があつて、漸く政に倦みかけた帝を諫奏し奉ること度々であつたが、一向御聽き容れがないので、藤房は遂に官を棄てゝ隱れたといふ。

果せる哉、尊氏は胸奥の野望を遂げる時機が來たとばかり、終に叛旗をひるがへした。

それは建武二年夏のことで、北條時行が關東に於て叛亂したので、尊氏命を蒙つて之れが鎭定に赴く途中、鎌倉に依つて天下に覇を稱することを宣言したのであつた。衆に越えて彼れを行賞し、衆に越えて彼れを寵愛せられてゐた帝の御驚きは、實に一方ならぬものがあつた。で、その冬、菊池武重等の諸將に詔勅して、新田義貞に從

ひ尊氏討伐に向けられた。正成と長年とは此の時は京師の守護として殘つた。

此の軍義貞は散々な敗北であつた。尊氏の弟直義が函嶺の險に據つて防いだので、官軍の將菊池武重が先登となつて、强かに敵を擊ち退けたが、駿河の竹下の方で會戰した別軍が敗北して、その一方の將と頼まれてゐる大友貞宗、鹽谷高貞などの輩が、續々尊氏に降服し、鋒を逆しまにして攻めたから、菊池武重は殘兵四百騎と共に、義貞を扶けて西に走つた。東國に於ける官軍の此の敗北は、諸國の形勢に一變を來し、先づ赤松則村が尊氏に援じて播州に起つた。其の他、建武の論功行賞に不平を懷いてゐる者は、窃かに官賊兩軍の形勢を觀望してゐた。

建武は三年で延元となつた。その正月、尊氏直義の兄弟は、諸將を率ひて騎鼓堂々として京都へ攻め上つて來た。之れに備へる軍の配置は、先づ正成は五千の兵を率ひて宇治を守り、名和長年は源忠顯、結城親光と共に兵二千を以て勢多を守り、何れも義貞の指揮を受けたのだが、義貞の軍は大渡、山崎の守りを失ひ、諸軍又戰ひ利

あらずして、尊氏をして恣まゝに京師に入らしめた。結城親光は敗走するのが殘念であるといひ、降參を裝つて尊氏を刺さうと企てたが、事發覺して終に自殺して了つた。

帝は倉皇として叡山へ行幸あらせられた。宮闕は既に賊軍の手に歸して、狼藉到らざるなく、長年が叡山の行在所へ行く前、一度宮闕に名殘りを惜しまんものと行つて見ると、既こ輪奐の美、粉壁の裝ひ、いづれの所にも索めることが出來なかつたので彼れは憤怒に任せて群がる賊軍の中に斬り込み、十七ヶ度敵を突破した後、徐ろに行在所へ走せ參じた。そこには既に正成も參向してゐた。

新田の部下で、大渡の守りにあつた者に、勅使河原丹三郎といふ武士があつた。彼れはその二子と共に、軍破れて退いたが、帝が叡山へ行幸せられたことは知らず、何所までも御供申上げんものと、京師に引つ返したが、既に賊軍に蹂躙せられてゐるのを見て、

『あゝ、我等は最早や亡朝の臣となつたか、此の上は何の面目あつて逆臣に仕へよう

ぞ』と言つて、父子三人羅城門のあたりで腹を切つた。眞の忠臣は、名あるも、名なきも皆な斯うした至誠の顯はれがあつた。

叡山の衆徒が、賊軍に頑强に抵抗してゐる間に、かねて尊氏の叛亂を聞いて、晝夜兼行で西上しつゝあつた陸奥守兼鎮守府將軍たる北畠顯家の五萬の兵が到着したので、敵味方、軍の形勢は一變した。

尊氏、直義は一旦京師に入つたが、正成の奇略と、顯家の軍の威力と、義貞其の他の諸軍の爲めに四方から攻め立てられて、二月の餘寒烈しい中を、兄弟は殘兵をまとめて湊川を指して走つた。官軍の追擊益々急なので、尊氏は赤松則村をして播州を守らしめ、海に航して九州に逃れた。彼等をして九州に遁れしめたのは、恰かも虎を野に放つたやうなものである。彼等が九州の兵を驅り催して、再び東上することがあらば、由々しき味方の大事であると、正成は尊氏等の首を得る迄追擊することを主張したが、總大將たる義貞がその議を容れなかつたので、遂に長蛇を逸したのであつた。

俗傳、此の時義貞は宮廷から下し賜はつた美女の愛に溺れて、思ひ切つた追擊をなし得なかつたのだと。左中將義貞たる者、それほどの痴呆であらうとは思はれないが、然し彼れが軍陣に處して、籌算よく正成の果斷と鬼謀とに及ばぬものがあつたことは確かであつた。

五、

追擊軍のことに甚だ優柔不斷であつた義貞も、播磨以西が次第に尊氏に應じて動搖しだしてからは、捨ておくわけにも行かず、三月になつて、先づ赤松則村の據る白旗城、攻めたが、城も堅固、守備も頑强で容易に拔くことが出來ない。官軍の總大將たる義貞が、軍の主力を率ゐて此の一城を拔くことが出來ぬといふことは、單にその合戰の不利だけに止まらず、四方に形勢を觀望してゐる諸豪族をして、漸く尊氏に傾かしめるの形勢を助成した。此の意味に於て義貞の赤松攻、溯つては追擊軍の時機を

誤つたことは、官軍に取つて由々しき不利を招いたものであつた。若し極端に論ずるならば、尊氏をして野望を遂げしめ、足利十五代の武門政治を開かしめたのは、一に官軍の將たる義貞の措置宜しきを得なかつたからであるとも言ひ得るのである。

義貞の弟義助は、兄とは違つて、餘ほどてきぱきとしてゐた男であつたと見えて義貞が白旗城を攻めあぐんでゐるのを見ると、

『力を一城に渴すの不利は、曩に北條の大軍を以てしても、金剛山に籠城の楠殿小勢を攻めて、到頭より勝たなんだことでも知れてゐるでは御座らぬか。尊氏既に九州にて大軍を驅り催し、近々攻め上るとの噂も御座るに、今は斯くてあられぬ秋では御座りませぬか』と進言した。そして軍を二手に分けて、一手は依然城を圍ませておき他の一手を以て舟坂を攻めることゝした。但し舟坂へは義助が向つたのであつた。

兒島高德は中國筋殆んど全く尊氏に應じた中に在つて、孤軍奮鬪を續け、備後の福山城を攻めたが、部下が頻りに動搖したのと、賊軍には頻りに新勢が附いたのとで、

戰ひ利あらずして、暫く三石山に逃れてゐた。そこへ義助の軍が舟坂山攻擊に向つて來たので、高德は雀躍して喜んだ。そこで兩軍氣脉を通じて、舟坂の賊軍を狹擊したので、流石の敵も守りを捨てゝ遁れた。此の勢ひ以て中國を討伐したならば、赤松の軍は全く無援孤立となり、開城するより外なく、如何に尊氏が九州の大軍を率ゐて攻め上つても、足がゝりとする所もなく、策の施す所なからしめたのであるが、惜しい哉、此の時には、赤松から尊氏の許に急援を乞ふ密書が達してゐたので、彼れは水陸五十萬と註する大軍を率ひて、期を早めて攻め上つて來た。直義は陸路、尊氏は海路兩軍の威風堂々たるを見て、路々馳せ加はる者頗る多く、直義の軍が播摩に達する頃には、陸路だけでも五十萬と註せられた。

此の大軍を引き受けて戰ふ總大將義貞の戰略は頗る怪しいものであつた。義貞は所詮我が兵だけでは防ぎがたいので、使を京都に馳せて援軍を求めた。そこで帝は正成を召して、直ちに赴いて義貞を援けるやうにと命ぜられた。正成は深く思ふ所がある

樣子で、

『畏れながら、尊氏今度は九國の兵を擧つて攻め上つて來ることに御座りますれば、勞餘の我が兵を以て之れに當ることは、所詮難儀と存じまする。戰の道は一ならず、要は勝利に御座りますれば、先づ陛下には叡山に行幸あらせられ、新田殿を召し還され、故意と賊軍を京都に誘ひ入れて、不意に彼等の糧道を斷ちまするならば、大軍は京都に在つて忽ち兵糧に窮し、日々に散り行くは見易きことに御座りまする。戰はずして敵を馳らすの法、是れ合戰の第一義で御座りまする』と建策した。寡兵を以て大敵を引き受ける戰略として、四方山もてめぐらす京城の地を擇んで、大敵を誘ひ入れ兵糧攻めにするとは、確かに臨機の戰略たることを失はないが、不幸にして此の建策は帝の容れ給ふ所とならなかつた。

それは參議藤原清忠が此の策を不可として、

『賊は大軍とは聞ゆれど、曩に鎌倉より攻め上りたる時と、さしたる變りはあるまい

と思はれる。王者の帥は天命有るもの、宜しく之れを外に防ぐべし、京城を去るらんとは、最後の手段ぢや。味方小勢なりといへども、毎度大敵を攻めなびけたるは、是れ全く武略の勝れたるにあらず、只だ聖運の天にかなへるが故なれば、戰ひを帝都の外に決して、敵を討ち亡ぼさんこと、何の難き事があらう。されば此の際、時を移さず兵庫へ馳せ下り、義貞と力を協せて、一戰に敵を滅ぼすこそ上策なれ。』と笏を立て直し、身を反らして、喋々と述べ立てた。斯うは言つたが、その實は、又都の地を離れて行在所に供奉することが厭であつたのである。兵を解しない長袖者流か、軍議に與ることは、昔から武人の嫌ふ所である。

併は帝は此の參議清忠の言をお用ひあつて、正成には直ちに西下するやう御諚があつた。必勝萬全の策が用ひられぬからは、此の出陣正成は討死を覺悟しなければならぬ。それは元弘の時初めて笠置の行在所に召された時から、一身一命を君に捧げてゐるのであるから、死は決して厭ふ所ではないが、天下の形勢を見れば、自分の死後は

必ず尊氏の天下となる、その時至尊の御身や親王の御身に如何にならせ給ふであらうか、それを思ふと今は死にたくない、賊將尊氏の首を見るまでは生きてゐたい。けれど勅命には違背出來ぬ、一旦は思ふ所を奏上したが、それが用ひられなければ、此の上は死を決して勅命を拜受するまでゝある。

時は延元元年五月十六日、烈々たる夏の日も正成が心を悲しむか、今日は曇りがち都の空には暗雲が低迷してゐる。正成は弟正季一子正行を初め、一族郎黨を引き具して、今生の見納めに宮闕の甕を振りかへりながら都を退いた。

切めては我が志を、我が子正行に繼がせたいものだと、櫻井驛に着いた時正行を親しく膝下へ呼んだ。正行時に年十一。

『我れ聞く、獅子は子を產みて三日を經なば、親ら之れを千仞の谷に突き落すに、その子、獅子の氣象あれば、跳ね返りて死を免るゝとかや。況して汝は人の子、年は十一、よう父が申し聞かすこと、聽きわけでは叶はぬぞよ。此の度の合戰は天下分け目

ちや、生きて汝に會ふのもこれが最後であらう。正成討ち死にすれば、天下は尊氏がものとなるは定 依つて汝は、假令誘はるゝことあるとも、福ありとて利に向ひ、禍ありとて義を忘れては相成らぬぞ。父が今日までの忠義を、決して決して汚しては呉りやんなよ。假りにも一族郎黨只だ一人にても生き殘つて在る間は、金剛山の城に立てこもり、君の御爲め身を棄て命を棄てゝ、御奉公申上ねばならぬぞよ。父への孝行は、此の外にありと思ふな。』有名な櫻井訣別の教訓は之れである。忠を中途にして死に行く身は、勅命なれば否まれぬが、殘る忠義を我が子に繼がせ、我が魂の息を、正行の魂の窓に吹き入れんものと、此の教訓を遺したのであつた。十一歳とはいへ正行も父が子、討死にと覺悟の父を見捨てゝ、その身ひとりが河内へ歸ることは心に忍びぬ。懷かしき父死して後、我れひとり生きて何かあらんとも思つた。

『どうでも合戰の御供を……』と涙のこみ上げて來る胸を押へて願つたが、許されぬは固よりのこと、正成は眼を瞋らして言葉も荒く、

『未練者！、まだ父が申すこと合點が參らぬか、强つて合戰の場に臨むと言ひ張らは最早や父ではないぞ、子ではないぞ。さ、これは父が記念の菊水の短刀ぢや。必ず之れで賊將の首を搔き、地下の父を慰め呉れよ。いざ、行け、河内には母が待ち佗びつらう！』

泣く〳〵歸り行く正行が後姿は、世にも哀れな傷ましいものであつた。鬼をも組まんず勇將猛卒も、此の光景を見ては鎧の袖を濡らさぬはなかつた。

今は早や心にかゝる雲もない正成は、兵庫に到つて義貞を慰め勵まし、終夜ら訣別の盃を酌んだ。湊河原に月見草が、よな〳〵と涼風に搖れてゐる。

斯くて早や夜が明けたので、いざとはかり義貞に別れて陣營の外に立てば、潮路遙かに舳艫に楯を押し並べ、旗を汐風に吹かせつゝ、順風を帆に孕んで來る萬千の兵船が、煙波渺々たる海の面、數里の間に漕ぎつらぬ、舷々相軋り、舳艫相摩して進んで來るのが見えた。瞳を轉ずれば、陸上には、須磨、鹿松岡、鵯越のあたり、二引兩

四目結、直違、左巴などの旗五六百流差しつらぬ、雲か霞と群がつた人君が、只だ犇めき犇めいて進んで來るのであつた。

正成は手勢僅かに七百餘騎を提げて、直ちに湊川の西の宿に到つて陣を張り、陸上の敵に備へた。義貞が弟の脇屋義助は、經ケ島に陣を取つた、その勢五千餘騎。大館氏明は三千餘騎に大將となつて、燈籠堂の南の濱に控へた。さて新田左中將義貞は總大將のことゝて和田の岬に本陣を据え、その勢二萬五千と註せられた。

五月二十五日晝四ッ時（十時）から合戰が始まつた。

六、

此の戰ひに賊將直義の軍にかけ向つた正成等が、如何に激しい合戰をしたか、太平記の記す所に依ると、

「正成、正季東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、好き敵と見るをば、馳

せ並べて組んで落としては首を取り、合はぬ敵と思ふをば一太刀打つて懸け散らす正成は正季と七度合して七度分る。其心偏に左馬頭（直義のこと）に近づき組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百騎に懸け靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、鏃を蹄に踏み立て右の足を引きける間、楠が勢に追ひつめられて、既に討たれ給ひぬと見えける所に、藥師寺十郎次郎只だ一騎、蓮池の堤にて返し合はせて馬より飛んで下り、二尺五寸の小長刀を取延べて、懸る敵の馬の平首引き廻し、斬つては刎ね落し刎ね倒し、七八騎が程斬つて落しける其間に、直義は馬を乘り替へて遙々落延び給ひけり」

その奮戰の樣が思ひ遣られる。幾萬幾十萬の大軍でも、大將一人を信賴して戰してゐるのであるから、その大將を討ち取れば、部下は忽ち潰走する。正成等は小勢を以て幾十倍幾百倍の大軍に當るのであるから、直ちに敵の中堅の突くの戰法に依つたのであつた。

將に漸く賊將を得んとして終に逸して了つた兄弟の落脈は如何ばかりであつたらう。

兎角するうち、尊氏が援兵を派して直義を助けたので、楠の軍は今や腹背に敵を受けた。いざと言つて正成兄弟は馬首をめぐらして、此の援軍の眞只中に駈け入つた。血戰十六合、暫し疲れを憩うて馬上に踏んばり、從ふ部下を振り返れば、あはれ七百騎が只だ七十三騎に討ちなされてゐる。

早やこれまでと、正成は弟や郎黨を振り返つて促し、湊川の北なる民家に馳せ入つた。

鎧を解けば身には十二個所の創を被つてゐる。

『いよ〳〵最後ぢや喃』正成は弟を顧みて、靜かに斯う言つた。家の前後には重傷に呻く部下の聲も聞える。

『左樣におざりまする。』正季も鎧を解きながら靜かに答へた。血汐がどす黑くなつて

泌み出てゐる正季の鎧直垂を、正成は傷ましげに見やりながら、

『したが、今日ほど、思ふさま敵を斬つたことはない喃。』

『面白いほど斬りまいた、直義を得なんだが殘念でおざる。』

『致し方あるまい。』正成は胸を搔きひろげた。

『さて、死んでから何うせうか喃。』と更に笑顏になつて弟を見た。

『言んでもないこと、七度人間に生れ來て、國賊を亡ぼす覺悟におざる。』

『うむ、よう言ふた、同じ覺悟ぢや。さらば……』と正成はエイと弟の方へ膝を捩ぢ向けた。正季は膝を前に進めた。

『賊の來ぬうち急ぎませう。』

『諾！』

兄弟は帝都と思しきあたりを無言に伏し拜んで、やがて脇差を拔いて、兄は弟を、弟は兄を、同時に刺し違へて、朱に染つて倒れた。此の光景を見た部下は、皆な思

ひ〳〵に腹を切つたり、刺し違へたり、何れも遅れじと主の跡を追つた。正成行年四十三、死を共にした一族は十六人、從士は五十餘人であつた。湊川に水清く、芳烈千載の下なほ高い香りを放つてゐる。

賊軍は正成の首を得て大いに喜び、一旦は六條河原に懸けたが、流石にその忠烈に感じたものと見えて、

『跡に遺つた妻子の者ども、今一度空しき貌なりとも見たいであらうと、これを河内へ送り届けた。正成が妻室の歎き、正行が悲しみ、併し正成が妻は世にも賢婦人であつたから、正行が悲しみの餘り自殺を圖らうとしたのを見て、強く意見を加へた。正成が櫻井驛の訣別の教訓と並べて、母の此の訓誡は、兒童走卒も知つてゐる有名な物語りである。

さても官軍の敗報頻りに京師に到つたので、帝は倉皇として叡山へ行幸あらせられた。參議清忠は如何の面目を以て帝の御供をしたであらうか。彼れが兵を解しない長

袖者の分際をして、正成の建議を斥けさへしなければ、楠一族の如き惜しい忠臣を湊河原の露と消さずに濟んだかも知れない。

義貞以下諸將も敗走したので、尊氏は大軍を率ゐ、悠々として京師を占領した。そして北朝光嚴院の御弟を御位に卽けまゐらせた、これが北朝第二代の天子光明天皇である。

間もなく南朝方の義貞を初め名和、菊池、土居、得能などが、寄り〳〵殘兵を集め又四方に義兵を募りなどして、大擧京師に尊氏を攻めたが、大いに敗れて、名和長年は終に手兵二百餘と共に戰死して了つた。

冬になると、京都の尊氏は後醍醐帝の御許へ使者を奉つて、早く帝に宮闕へ還御あらせられるやう奏上した。無論尊氏に於て謀る所があるのは見え透いてゐたので、近臣は皆な御止まりあるやう御諫言申上げたが、帝はお聽き容れがなく、終に還御あらせられたので、宗良親王は遠江に走り、懷良皇子は大和に逃れ、義貞は皇太子恒良

及び護良親王を奉じて北國へ落ちて行つた。

果せる哉、尊氏には深い計略があつた。彼れは後醍醐天皇から三種の神器を、光明天皇に譲らしめて、已れが擁立した天子を正統の君と仰がうといふにあつた。後醍醐帝は曩に北條高時からも同樣のことを迫られたが、頑として應じ給はなかつたほどであるから、尊氏の願ひも斷乎としてお斥けになつた。で、尊氏は終に帝を花山院に幽閉し奉り、供奉の僧祐覺等を殺し、その餘の者も引つ捕へたが、只だ三條景繁だけは侍することを許した。

この間に幾星霜かを過ぎ、帝が三條景繁の進言に依つて、私かに花山院を脱して、吉野へ潛行あらせられると、間もなく正成が遺子の正行は吉野朝廷に參向して、父が遺命を魂に刻んで、父にも劣らぬ忠節を勵むのであるが、それは玆には省略するそして正成が自刄に際して、弟正季と相見て、「七度人間に生れて、國賊を亡ぼす」と言つた忠臣の英靈が、終に亡靈となつて現はれたといふ傳説を略説して、此の篇を

終ることにする。固より俗書が載せてゐる所の傳説に過ぎないけれども、正成の忠魂義膽の象徴であると見る時、津々として無限の興味を感ずるのである。

七、

足利氏の部下に大森彦七といふ剛勇の者があつた。彼れは湊川の合戰に加はり、殊勳があつたので、數多の領地を賜はつて、榮華に暮らしてゐた。

或る日、猿樂の催しがあつた。舞臺の造られてゐる場所は海邊であつた。彦七は別けても猿樂が好きなので、見物に出かけて行つた。

數番の猿樂があつて、夜も次第に更けて來た。見物も大分疲れを覺えた頃であつた舞臺の後ろの海上遙かに、何か光る物が三百程現はれた。星でもない、海人の漁火か、沖漕ぐ舟の篝火かと見てゐれば、次第に近づくのを見れば、それでもない。一群立ち上る黑雲の中に、不思議や玉の御輿を舁ぎつらねて、數多の將士が甲冑に身を固め、馬

に跨り、前後左右に肅々として供奉してゐる有樣、何さま高貴の御方の行列と覺えた。次第に近づいて來て、終には猿樂の舞臺の上に、ずらりと覆ひかぶさつた。これを見た見物は何れも怖れ戰き、色を失つて立ち騷いだ。と、雲の中から高らかな聲で、

『大森彦七これに在るか、申すべき事のあつて、楠正成向ふたり。』と呼ばはる聲、彦七は正成の聲は聞き覺えがないが、如何にも嚴かな聲で、五臟六腑に泌み渡るやうに思はれた。

彦七固より剛の者、少しも怖れたる樣子なく、

『人死しては再び歸ることなし、楠判官は湊河原の露と消えたれば、今此の所に現はるゝは、定めてその魂魄が靈鬼となつたのであらう。あるにても、楠殿には何用あつて我れをば呼び給ふぞ。』と些つとも油斷せず、身かまへて斯う言つた。雲の中の聲は一層嚴かに

『汝知る如く、正成存命の間は、種々謀事をめぐらして、北條の一家を亡ぼし、先帝

の宸襟を安め奉り、天下は一統に歸して、聖主の萬歳をことぶく所に、逆臣尊氏直義の兄弟現はれ、天下を亂し、君を傾け奉り、忠臣義士屍を戰場にさらして、悉く黃泉の客となりたれば、怨念今に於て止む時なし。斯く申す正成が怨念は、凝つて尙ほも足利の天下を覆し、王業を再び古へに復さんとこそ謀るなれ、さるにても、その謀事に大切なるは稀代の名劒なり。われ熟々大千世界を見渡すに、願ふところの劒我が朝の內にて三振あり、その一は、日吉大宮にありしものにて、我れ既に之れを請ひ受けたり、その二は、賊將尊氏が許に在りしもの、こは尊氏が寵愛の童に身を變じて、首尾よく我が手に入れたり、その三は、汝が腰に帶びたる刀なり。汝知らずや、その刀は、壽永の昔、平家壇の浦にして亡びし時、惡七兵衛景淸が海に落したるを、江豚と申す魚が呑み、東に走る途中、讃岐の宇多津の沖にて死し、そのまゝ海底に沈みあること既に百餘年、その後、漁夫の網に引かれて、再び世の光りに逢ひたるが、廻り〳〵て汝の手に傳はりたるなり。我れ今その刀をだに手に入れなば、願ふ所の三

振の名劍揃ひ、尊の代を覆さんこと、掌の中なるべし。汝神妙にその劍を進らせよ、先帝の勅諚にて正成受取りに向つたるぞ。』と言ひも終らぬうちに、今まで星の見えてゐた空が遽かに掻き曇つて、轟と吹き起して來る風は砂塵を飛ばし、舞臺の燈火忽ち消されて、あやめも分かぬ如法の闇となつた。あれよ〳〵と人々喚き騷いでゐる頭上に、鮮血が迸るかと思はれる眞紅な雷光が走つて、雷東西に鳴りはためいた。人々はモウ生きたる心地はなく、皆な耳を覆ひ眼を伏せて、息の根も止まるかと思はれた。彦七も流石に驚かぬではなかつたが、斯かる中にも少しも騷がず、腰なる刀の柄を確と握つて、

『近頃、異なことを承はるものかな、此の帶刀、それほどの名劍と知らば、猶更以て渡すこと相成らぬ、帶劍は武士の魂とは知らざるか、別けて、今聞けば、此の帶刀を得て足利殿を滅ぼすなりと、笑止や、我れは足利の忠臣、厚き恩顧を受けて、斯く安樂に在るも皆な足利殿御恩なれば、假令身は寸斷せらるゝとも、やはか、やは、

此の刀渡してよいものか、いざ、早々歸つて、成佛いたされよ。』聲を勵まし、虛空を睨んで突つ立つた有樣は、天晴れ勇士と見えた。

正成の亡靈は天地に響く大聲で、からゝと笑ひながら、

『小癪なる汝が一言、渡さぬとあらば我が力にて奪ひ取り呉れる、油斷致さず守り居れ。』と罵りながら、忽ち海上さして飛び去つて終つた。彦七は腰なる一刀を按じて、その無事なるを喜び、やがて家路についた。

それから數日を經て、又々大暴風雨があつた。雨は車軸を流すが如く、風は猛獸の吼えるかと、物凄いこと言ふばかりない。

彦七は、斯かる夜には又物の怪が現はれるかも知れぬ、若し現はれたら、今夜こそは正體を見屆けねばならぬと、椽側に敷皮を出して座を占め、手垂れの滋籐の弓に絃をかけて、今や〳〵と待つてゐた。

夜半を過ぐる頃、次第に眠氣を催すので、彼れは若しも彼れ刀を奪はれはせぬかと

確と腰に帯びて、心を引き立て〳〵待つてゐる所に、やかて空の彼方に黒雲湧き起ると見る間に、彦七の頭上へ舞ひ下つて來た。彼れは眼を見開いて、屹度黒雲を睨まへた。

『いかに彦七、これに在るか。』雲の中に起つた此の聲は、過ぐ夜のと同じである。

『汝その刀を神妙に渡すや如何に。』

『おゝ、今宵は定めて來るやらんと、宵のうちより待ち居りしぞ。先づ尋ねたきは、事も夥しきその人々、伴ふ方はそも〳〵誰人ぞや。』

『汝には此の御輿が眼に入らぬか。これに在すは、畏くも、後醍醐天皇を初め奉り、兵部卿護良親王、新田左中將義貞、斯く申すは楠河内判官正成、それ餘は何れも當年官軍の將士ぢや。』

『して、先帝には何れに在しますぞ。』

『先帝には欲界の六天に御座あつて、宮方の將士今もなほ御守護申上げつるぞ。』

『さらば正成殿、御身は今何して御座るぞ。』

『某は今七頭の牛に乘つて、天上界を警衛し、至尊を守護し奉れるぞ、いざ、見參』と呼ばはるとかと思へば、大松明が幾十幾百となく一時にパッと點いて、あたりは晝を欺くばかりの明るさとなつた。此の明りに依つて、彦七空を見上げると、一群立つた雲の中には、眼もさめるばかりの玉の御輿を、十二人の武者が、甲冑に身を固めて舁ぎ上げてゐる。御簾を通して、後醍醐天皇の玉體が微かに見える。彦七はなほ瞳を凝らして見てゐると、兵部卿護良親王が八龍の車に召し、一千餘騎を從へて、御輿の右翼を固めて居られ、新田左中將義貞は嚴めしい甲冑姿で、隨兵三千餘騎、御輿の左翼を固め奉つてゐる。楠河内判官正成は、湊川合戰の時の扮裝で、頭の七つある牛に乘り、七百餘騎を以て前陣を固め奉つてゐる。その他、元弘建武の役に討死にした官軍の將士、悉く甲冑に身を固め、後陣に控へ、凡そ虚空十里ばかりが間は透き間もなく並んでゐる。

此の時彦七の家來は、主人の身を氣遣つて雨を冒して庭上に現はれた。彦七はなほ暫く瞬きもせず空を眺めてゐたが、不圖家來どもが其所に來てゐるのに氣がついて、

『あれを見い、笑止や、事も夥しい宮方の亡靈どもぢや。』と云ふうちに、空は再び眞の闇となつて、又仰者の形も見えなくなつたが、併し正成の亡靈の聲だけは、前と少しの變りなく聞えて來る。

『いざ彦七、最早や猶豫はならぬ、その刀、これへ渡せ。』

『おゝ、假令第六天の魔王ども何萬騎押し寄せ來るとも、やはか、やは、此の刀を渡してなるものか。汝の手に渡らぬその先きに、いで尊氏公へ献上せん』と言ひ捨てゝ奥へ駈け込んだ。

正成の靈はからゝと笑つて、

『笑止やな、此の國假令都へ陸續きなりとも、我れ途中に立ち塞がらば、天を朔り、地を潜る秘術あるとも、やはか、やは通してなるものか、況して海を隔つる此所と都

汝が船の無事に都へ着くと思ふか。』斯う言ひ放つて西の空へ飛び去つた。正成の亡靈は今にも彦七につかみ掛つて、彼の名刀を奪ふやうな口吻を示しながら、容易にそれを奪はうともしないのは、斯うして終に彦七の心を狂はせる企みと見えた。

果せる哉、彦七はその後屢亡靈に惱まされてゐるうち、その振舞ひが狂亂して來たので、一族の者が相議して、座敷牢へ押しこめて了つた。或る夜又風雨雷鳴が激しいので、座敷牢の警固をしてゐる家來ども、例の亡靈が現はれはせぬかと、薄氣味惡く顔を見合はしてゐると、忽ち彦七の寢所の扉をガバとばかりに踏み碎いて、數十人の者が亂れ入る物音がした。

『素破こそ、御座んなれ』と、警固の武士、おつ取り刀で驅けつけたが、更に人影とても見えない。彦七の身にも變つた樣子とてはない。

『はて、怪し』と思つてゐると、忽ち天井から、毛だらけの大きな手か、音もなく突き出て來て、人々のあつと云ふ間もあらせず、彦七の髻を引つ掴んで、屋根裏から

破風口へ出ようとするので、彦七は虚空に提げられながら、件の刀を抜いて、怪物の胸中を三刀まで刺し通した。刺されて怯む所を、彦七はムヅと組みついて、又七刀刺した。そして組んだまゝ屋根から庭上へ轉げ落ちると、不思議や怪物の傷口から、人の頭ほどもある火の玉が現はれ、物凄い光りを曳いて大空へ舞ひ上つた。

警固の武士が庭上へ驅けつけて見ると、彦七はそこに正體もなきほどに昏倒してゐた。併し一念のこもつた彼の刀だけは、確と握つてゐる。傍らに大きな牛の首が一つ斬られて轉がつてゐる。

『あの正成の亡靈といふが乘つてゐた、七つの首の一つであらう、さても怖ろしいことぢや』と家來は皆な色を失つた。

彦七は家來の介抱で漸く息を吹き返したが、彼れは眼を開くと直ぐに、

『大切の刀は如何いたした』と叫んだ。自分の手に在ることを忘れて叫ぶほどに、彼れは心が混亂してゐるのであつた。

又三日ばかり經つた夜、大暴風雨があつた。彦七の家來達は、此の前のやうな不覺があつてはならぬと、互ひに相戒め、終夜の見張りに、眠氣ざましの爲め、雙六を打つてゐると、眞夜中を過ぎた頃、百餘人の警固の者ども、何に愕いたか、聲を揃へて、ア、ア、と叫んだが、それなり、恰かも強い酒に醉つた者のやうに、グウタリと首を垂れて了つた。と、座敷に一杯しさうな大きな山蛛蜘が天井から下りて來て、首垂れてゐる武士達の上を這ひ廻はつて、縱横に糸を張つて、又天井へ上つて行つた。

此の時、彦七は何者にか愕かされたやうに、ガバと跳ね起きざま、

『心得たり』と叫んで、今天井裏へ隱れやうとする怪物に向つて躍りかゝつた。上になり、下になり、大剛の彦七にも手に餘つて見えた。

『寄れや者ども』彦七は組討ちをしながら家來達を呼んだ。此の聲にバアと眼のさめた家來達は、起ち上らうとしたが、指の太きほどもある蜘蛛の糸を縱横にかけられてゐるので、恰かも網をかぶせられたやう、何うすることも出來なかつた。その間に彦

七は死物狂ひになつて、終に怪物を取り押へた。

『燈を持て、燈をもて。』

彦七が斯う叫んだ時は、不思議に彼の蜘蛛の糸は、腐れ縄の如くプス〳〵と切れたので、家來どもは我れ先きにと起き上り、各自に燈をともして彦七の側へ驅けつけた見るとウヨウヨと澤山の肢がうごめいてゐる。一同が手傳つて動かせぬやうに押へつけると、宛ら瀬戸物か土器の壞れるやうな音がして、怪物の形が消えたと思へば、愕く人々の眼の前に、人間の生首がひとつ轉がつて、額が打ち碎かれてゐた。

彦七は今まで忘れてゐた腰の刀を探つて見ると、こは抑もいかに、鞘ばかりで、大切な刀は影も形も見えなくなつてゐた。彦七は仰天したが、今は此の事秘してゐるわけに行かず、使ひを以て京都なる尊氏の許へ言上に及ぶと、丁度其時は直義が大病で上下大騒ぎをしてゐる時であつた。直義の病氣は暫く經つて癒えたが、次ぎには尊氏と直義とが不和になつた。又その功臣達の間にも互ひに不和を生ずる者があつた。殊

に尊氏の執事、高武藏守師直が、鹽冶高貞の室を奪はんとして、終に高貞を討ち滅ぼすなど、足利氏は主從共に次ぎから次ぎへと、色々な災厄が起つた。是皆な正成の亡靈が祟りをなしたのであるといふのが、此の傳説の骨子である。前にも述べた通り此の傳説の如き事實が果して存在したとは、到底信じられないことであるが、生きかはり死にかはり七生までも世に現はれて、朝敵を討ち滅ぼさでは止まぬ至誠の忠魂はこれほどにも熾烈であつたらうかを想像するには、好適の傳説たるを失はない。

八、

斯の至誠忠烈無比の正成は、如何なる家系に如何にして生れ出たであらうか。遺憾ながら今日の史學界では、楠氏の系統及び正成幼時のことは、的確なる研究が盡されて居らぬ。本篇が直ちに筆を元弘の出仕に起し、一語の彼れが祖先及び彼れが生ひ立ちに及ばなかつたのはそれが爲めである。傳説口碑を素とした楠氏系圖や多聞丸生ひ

立ちの事歴はあるが。垣より信憑するに足るものではない。

奈良朝の昔、聖武、孝謙兩天皇に仕へて、左右大臣の要職に居り、七十四歳の高齢に達するまで力を國事に致し、本邦和歌集の濫觴にして、且つ我が歌學界の至寶と貴ばれてゐる萬葉集を撰んだ井手の左大臣橘諸兄が、正成の曩祖であると一般に想定されてゐる。けれど諸兄より後、正成の父正康に至るまでの間が、諸系圖何れも區々であつて、何れを信じてよいか解らないのであるから、若し疑へば、諸兄曩祖説も疑はれぬこともない。

世に橘氏系圖といふものが數種あつて、「續群書類從」の中にも二三種現はれてゐるが、それらに於て一致點を見出し得るのは、曩祖が橘諸兄であるといふこと、及び正成の父が河内の一豪族であつたといふことだけである。而かも此の正成の父にしてからが、正遠としてあるのもあれば、正玄としてあるのもあり、大日本史には正康としてあるなど、諸説區々である。何れを信ずるかは、尙ほ今後の研究に俟たなければな

らぬが、現在では「大日本史」に依つて、正康説を採つておく方が賢明であると思はれる。

正成の母に就いては、更に史實が明らかでない。只だ「太平記」に、正成の母は久しく子供がなかつたので、信貴山の毘沙門天に百日の願掛けをして、その結願の日に夢想を得、後ち正成が生れたとの記事があるのみである。これだけでは何う考證の仕方もない。正成の幼名は、毘沙門天に授かつた子であるから、多聞天の多聞を採つて多聞丸と名づけたのであると言はれてゐる。果して毘沙門天の申し子であつたか何うかは知らぬが、幼名を多聞丸と稱へ、後ち長く此の多聞の稱を用ひてゐたことは、正行に送つた書狀にも、楠多聞などゝ署名してゐるから、確かなことであらうと思はれる。

多聞丸の誕生は、「南木誌」の定めてある所に依ると、伏見天皇の永仁二年で、彼の後鳥羽天皇が關東征伐を企てられた承久三年から、約七十年の後である。永仁二年か

ら起算すると、正成戰死の延元元年までは、足掛け四十三年になる。本篇に於て正成自刄の年を四十三歳としたのは此の說に據つたのである。

誕生の場所は、現今の河內國河內郡赤坂村大字水分字山の井といふ所だとの說で、今は田圃の中に十間四面ほどの地積を劃して垣を造り、中に石碑を建てゝ、碑面に「楠公誕生地」と刻してある。赤坂村は金剛山の西麓に當つてゐる。金剛山も信貴山も共に河內大和の國境に聳えてゐる。殊に金剛山は海拔四千三百尺で、近國に稀れな高山である。攝河泉の平野渺茫たる間、北に比良比叡の峻嶺、西に六甲の連山、東に生駒の山脈があつて、恰かも三方を取り圍んでゐる。その東南に巍峨として聳えてゐるのが此の金剛山で、他の諸山を瞰下してゐるの概がある。玆に正成が生れたといふことが、何となく偶然でないやうにすら思はれるのである。

次ぎに正成の幼時に就いて、これも「南木誌」に依ると、多聞丸六七歳の時には、既に十二三歳の兒童と角力を取つて、決して負を取らなかつた。十二歳の時初陣をし

て、敵の首を取つたとあるから、體の發育が普通の者より少くとも三四年は長じてゐたものと思はれる。單に體ばかりでなく、腦力も異常の發達をしてゐたらしく、或る時來客があつて、父正康と對談中、客が、自分は近ゐうちさる宮方へ御奉公することになつたが、高貴の方の家法など少しも心得ぬので、何うしたらよいかと思つてゐると言つた。正康も河內の片田舍に引きこもつてゐる豪族であるから、宮家の家法など知らう筈なく、返答に困つてゐた。すると多聞丸その時九歳であつたが。傍らに在つて之れを聞いてゐて、それは宮樣のお氣に入りの家臣の言動を、よく注意してゐたら自然に分るだらうと言つたので、客も父も驚いたといふことが、「南木誌」に記してある。

尙ほ又次ぎに述べる傳說なども、正成が幼時既に異常に智惠が進んでゐたことの證左となり、延いては彼れが長じて、智謀の將となつたことが想見される。

それは或時（矢張り十二三歳の時であつたらう）多聞丸が天王寺へ參詣した。寺に

大きな梵鐘があつたのを見て、此の鐘を指一本で動かして見せるが何うちやと言つた。同行の人々は千斤の梵鐘が子供の指一本で動かせようとは、馬鹿々々しくて信じられないが、戯れに、動くなら動かして見よと言つた。多聞丸心得たとばかり、梵鐘の側へ行つて、指をつけて、力をこめて押してはゆるめ、押してはゆるめ、長い間、間斷なく續けてゐると、鐘は漸次に動搖しはじめた。なほ力をこめて之れを續けたので、後には前後に激しく搖れて、人々を驚かしたといふ。物理學上から觀て正しく學理にかなつてゐるが、併し辨慶の泣指の傳說と同樣、正成の幼時の悧發であつたことを紛飾した一つの話柄に止まつてゐる。

多聞丸十五六歲頃までの學問の師は、觀心寺の住僧瀧覺坊聖瑜といふ坊さんであつたといふことが、近年になつて古文書に依つて發見せられた。十五歲以後は、大江時親といふ者に就いて文學兵法を十五年間學んだ。時親は當時赤坂村から程遠からぬ加賀田といふ村に住んでゐて。大江匡房七世の孫であると稱してゐた。文武の道に精通

し、殊に兵法に長じてゐたとのことである。

尙ほ、楠氏の菊水の紋に就いては、いろ〳〵の說がある。或る學者は、正成の紋を菊水といふのは誤りである、曩祖橘諸兄は非常に山吹を愛し、直垂に水に山吹を刺縮して用ひてゐたので、それが楠氏の定紋となつたのであるから、菊水でなく、山吹水であると主張してゐる。山吹水の旗押し立てゝなんどは、甚だ以て語品が惡い。すると又或る學者は、菊水の紋は正成の代から用ひ初めたものである、その故は、後醍醐天皇が曾に御盃を賜はり、御手づから菊花を盃に浮かべて、菊は齡を延べるものと聞く、これを以て汝の成功を祝すると仰せられた。正成感泣措く能はず遂に家紋としたのであると言つてゐる。何れにしても正成が忠臣たることに何の關係もないが、太平記などには、所々に菊水の旗とか、菊水の刀とかいふことが見えてゐるので、正成が菊水の紋を用ひてゐたことは事實と見て差支ないやうである。(終)

昭和十年三月十五日印刷
昭和十年三月三十日發行

精神修養 忠臣美談
【定價金一圓八十錢】

著者 夢想兵衛

發行者 東京市神田區須田町一丁目四番地 神谷勵

印刷者 東京市下谷區西町一番地 木村茂市郎

發行所 東京市神田區須田町一丁目四番地
電話神田四一四九番
振替東京六九八七〇番
大伸堂書店

不許復製

10 3. 27

終